

疫病に直面したキリスト者の歴史に学ぶ

金井由嗣

はじめに

新型コロナウイルス COVID-19 の世界的流行に直面した 2020 年から 2021 年にかけて、過去の疫病の大規模な流行においてその時々 of キリスト者がいかに振る舞ったか、その記録を参照して現在への教訓を導き出す趣旨の論文が歴史神学の分野から多数発表されている。本論文では英語圏から 4 本の論文を紹介し、それらが扱っている過去の事例とそこから得られる教訓を簡単にまとめた上で、現代の日本という文脈において我々キリスト者が感染症の急拡大という状況の中でいかに生きることが求められているのか、考察を加えていきたい。

紹介する論文は以下の通り（判明する範囲で、発行日順で紹介する）。

Gary B. Ferngren, “Searching for Meaning in Uncertain Times: Throughout history, pandemics have created moments of pause, renewed energy, and hope,” *In Trust* (Fall 2020), 22–25.

Bryan Just, “Historic plagues and Christian responses: lessons for the church today?” *Christian Journal for Global Health* 7, no. 1 (2020), 7–12.

Catherine Gunsalus González, “Christians’ Responses to Plagues: A Glimpse at the History,” *Journal for Preachers* 44, no. 1 (Advent 2020), 15–21.

Jonathan D. Quick, “Cura Personalis, Cura communitas: Loving our neighbor in Covid-19 times,” *Christian Journal for Global Health* 7, no. 5 (2020), 3–8.

それぞれの疫病の内容と社会への影響についてはウィリアム・H・マクニー

ル『疫病と世界史』と石弘之『感染症の世界史』¹を、疫病とキリスト教の関係性の歴史については Gary B. Ferngren, *Medicine and Religion: A Historical Introduction*² を参照した。

1、疫病の大流行に直面したキリスト者の記録

本論文で扱うのは、世界的な疫病の大流行に際してキリスト者が取った行動とその土台となった思想について、ある程度分析可能な史料が存在する事例である。疫病の流行があったことのみが記録されている例、教会またはキリスト者と直接関係しない証言が存在する例も多数存在するが、それらは基本的に扱わない。またできる限り同時代の証言を尊重する。

(1)「キュプリアヌスの疫病」

紀元 251 年から始まって、10 年以上継続してローマ国内で発生したことが確認できる。カルタゴの司教キュプリアヌスの説教³によって疫病の詳細な内容が伝えられているため、このように呼ばれる。なおアレクサンドリアの司教ディオニュシオスの 2 通の復活祭書簡がエウセビオス『教会史』に引用され⁴、そこから有益な情報を得ることができる。この疫病については土井健司による綿密な考証⁵と、ロドニー・スタークによる社会学の観点からの分析⁶が存在するため、それらに基づいて概要をまとめる。

¹ ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』上下 (中公文庫、2007 年)、石弘之『感染症の世界史』(角川文庫、2018 年)。

² Gary B. Ferngren, *Medicine and Religion: A Historical Introduction* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2014)。

³ 吉田聖訳「キュプリアヌス 死を免れないことについて」『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』(平凡社、1999 年) 283-303 頁

⁴ 秦剛平訳「エウセビオス『教会史』」下 (講談社学術文庫、2010 年) 131-134 頁

⁵ 土井健司『『キュプリアヌスの疫病』考：古代キリスト教におけるフィラネスロピア論のための予備的考察』『神学研究』62 (関西学院大学神学部、2015 年) 25-39 頁

⁶ ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国』(新教出版社、2014 年) 95-124 頁

①疫病発生の様相

- ・ローマ皇帝ガルススの即位後まもなく、251 年に感染が広がる。終結はガリエヌス帝の統治下、262 年と見られる (265 年とする説もある)。
- ・デキウス帝によるキリスト教徒への大迫害と外征 (251 年まで) の直後に疫病が発生した。
- ・251 年にローマで感染が始まり、260 年秋頃から 262 年にかけてアレクサンドリアで蔓延した。この間にカルタゴやギリシャでも感染が広がったことについての記録がある。おそらくローマ帝国全域に広がっていたと見られる。
- ・収束後に再拡大した事例が報告されている (特にローマ)。
- ・疫病の種類は特定できないが、「下痢と脱水、重篤な咽頭炎、嘔吐、眼の充血、四肢の壊死、歩行不能、聴覚と視覚の喪失」が症状として報告されている (ただし、単独の病気とは限らない)。
- ・ローマでは疫病の最盛期に 1 日で 5000 人が死亡した。アレクサンドリアでは推計で全住民の約半数が死亡した。

②疫病に際してキリスト者が取った態度

異教徒は病人を捨て、遺体は埋葬されないまま放置されたが、キリスト者は危険を冒して病人 (異教徒の病人も区別なく) の世話をを行い、多くが感染して亡くなっていった。結果として、キリスト教徒が看病した病人の中からは回復する者が現れ、キリスト教に改宗して別の病人の世話を行なった。

③キリスト教が疫病流行後の世界に与えた影響

- ・キリスト教だけが、苦しみと死への説得力ある説明を与えることができた。
- ・免疫を獲得した生存者が増加し、ローマ帝国の全人口に対するキリスト者の割合が増加した。
- ・異教徒のネットワークからキリスト者のネットワークへの転身が起こった。

(2) 中世後期と宗教改革期のペスト (黒死病)

14 世紀にヨーロッパに侵入して爆発的な感染を起こしたペストは、その後も断続的に流行を繰り返し、18 世紀に至るまで各地で重大な被害をもたらした。19 世紀末の血清療法の確立とペスト菌発見、20 世紀の抗生物質の発見によって治療法が確立するまで、ペストに対する根本的な解決はもたらされな

かった。

中世から宗教改革期に至るペストその他の疫病に対するキリスト教会の対処には、古代のそれとの明確な違いが見られる。古代世界においてキリスト者は迫害される少数者であって常に殉教を意識する存在であったが、中世においては幼児洗礼によって全ての住民が名目上のキリスト者であり、したがって古代に見られた犠牲的献身は、一部の例外を除いて一般信徒には期待できなかった。この時期に疫病の犠牲者にとって意味ある活動を提供したのはホスピタルを備えた修道院で治療にあたった修道士と、死に直面した患者に秘跡を授ける教区司祭、または病床の祈りにおいて平安を与える牧師であった。

中世には職業的な医師も存在した。大学の成立後は医学部で専門教育を受けた医師も生まれたが彼らの治療は高額で、庶民が受けられることは稀だった。民間療法の延長上にある町医者もいたし、疫病の流行時には町当局が雇ったペスト専門医も活動したが、医学的根拠のある治療とは言い難かった。一般の医師と教会や修道院の提供する医療とは相互に補完関係にあり、修道院でも大学教師が書いた医学書を用いて知識の向上に努めていた⁷。

宗教改革期にも各地でペストの流行があったことが知られる。修道院が廃止された地域では公的なホスピタルが設置され、牧師たちが患者に対する霊的ケアを行うことが期待されていた。マルティン・ルター、ジャン・カルヴァン、テオドール・ベザの対応が分析の対象とされている。

(3) 20 世紀の感染症大流行

細菌性の感染症に対する治療法(特に抗生物質)が確立した 20 世紀にも、ウィルス性の感染症の大規模な拡大が見られた。いわゆる「スペイン風邪」⁸、ポリオ、HIV の世界的な流行により、それぞれ多くの死者が出た。近代的な医療システムが確立した社会では教会が直接医療の責任を負うことはなく、患者に対する

⁷ 鈴木章仁「医学史とはどんな学問か 第2章 中世ヨーロッパにおける医学・疾病・身体」(けいそうビブリオフィル 勁草書房編集部ウェブサイト、<https://keisobiblio.com/2016/03/16/suzuki02/>)

⁸ 感染症に特定の地域と結びつけた名称を用いることには慎重であるべきだと筆者は考えるが、この名称が既に広く通用しているため、便宜上これを用いる。

牧会的・霊的ケアのあり方が検討の課題とされる。

2、過去の事例の分析と評価

(1) 「キュプリアヌスの疫病」について

この疫病に際してのキリスト者の行動は間違いなく驚嘆と称賛に値する。彼らは道端に捨てられたまま死を待つ状態にあった病人を進んで引き取り、看病し、その死を看取り、そして多くは自分も感染して死んでいった。自分たちを迫害していた異教徒の市民も分け隔てなく助けた。医学的な知識も治療の手段もなく、感染を防ぐ手段もないにも関わらず、ただキリストの命令に従うが故に、そのような行動を自ら選んだのである。異教徒にはこのような行動を取る人はいなかった。Fengren と Just は紀元前 430 年ごろにアテネを襲った疫病についてのトゥキディデスの記述から、古代世界における一般的な疫病の様相を描き出す⁹。キリスト者がこの世界に存在していなければ、3 世紀の疫病においても同様の光景が見られたと推測することは容易である。通常は病人の治療にあたるのが期待される医師や伝統的宗教の神官たちは、真っ先に逃げ出したようである¹⁰。

この称賛すべきキリスト者の行動について、今回紹介する著者たちは皆、現代のキリスト者も同じ行動を取るべきではないと考える点で一致している。筆者も同意見である。そのように考える理由を以下に示す。

①その時代には、未知の感染症患者に対して医療を提供する手段が存在しなかった。当時の医学知識は貧弱であり、治療技術も現在では省みられない体液理論と経験に基づくものであって、初めて接する病気には対処しようがなかった。病者に対する隣人愛の実践は、彼らを引き取って死に至るまで世話をする以外の選択肢が無かった。病者に適切な医療を提供する手段が存在し、感染拡大を防ぐ方法も周知されている現代において、同じ方法を取ることは適切ではない。

②彼らの行動は完全に自発的なものだった。当然ながら、自らの死を

⁹ Fengren, 22, Just, 7-8.

¹⁰ スターク、110-116 頁

前提にした看護・介護という行動を他者が強制することがあってはならない。González は、この疫病がデキウス帝による大迫害が終結した直後であったことに読者の注意を向ける¹¹。この迫害を生き延びた人々には、殉教者に対する憧れと同時に自分が生き残ったことへの後ろめたさの感情があり、殉教を希求する精神が顕著に見られた。病者を世話した後に自分も感染して死を迎えることは、一種の殉教と理解されていた。以下の引用がそのことを示している。

とにかく、わたしたちの兄弟の中の最も立派な人たちがこうした仕方でのこの〔世の〕生と訣別しました。それは長老や、執事や、一部の平信徒たちであり、彼らは大いに賞賛されました。このような死に方は篤い敬神の念と強い信仰の結果でしたので、決して殉教に劣るものではないように思われました。(ディオニュシオスの書簡、エウセビオス『教会史』7.22.8¹²)

この死すべき定めが他に何も与えないにしても、神の僕であるわれわれキリスト教徒にとって、死を恐れないことを学ぶにつれて、喜んで殉教することを望むようになる。これは訓練であって葬式ではない。これは心に剛毅の栄誉を与え、死を軽んじることによって、勝利の栄冠を準備するのである。(キュプリアヌス「死を免れないことについて」第16章¹³)

佐藤吉昭はキュプリアヌスの著作「棄教論」の背景を分析して、デキウス帝の迫害時に郊外に身を潜めて難を逃れたキュプリアヌスには殉教者や証聖者に対して引け目を感じる傾向があり、次の迫害時の殉教を強く願っていたことを明らかにしている¹⁴。彼はこの願い通り、ヴァレリアヌス帝の迫害により258年に殉教する。このような殉教への希求の念は迫害を生き延びたキリスト者の

大多数に共有されていたと見なして良い。

現代のキリスト者にこのような殉教願望を期待することは適切ではない。しかし、より本質的な主題として、キリスト者がこの世の生を超えた永遠の生命を信じ、そこに平安を認めていた事実を目を向ける必要がある。現代のキリスト者もこの信仰を共有しているのであり、死に至る可能性の高い感染症の流行下において、この信仰の内実が問われていることは古代の場合と何ら変わらない。コロナ禍にあって現実死を迎える人々に対して真の平安を与えることができるかどうかは我々に向けられた問いであり、この平安に基づいた行動のあり方について真剣に考えるべきなのである。キュプリアヌスの説教の冒頭の部分を引用する。

愛する兄弟たちよ。神の国がもう存在し始めているのだ。この世は過ぎ去るが、命の報い、永遠の救いの喜び、永遠の歓喜、かつて失った楽園の所有などは、もう手元に近づいているのである。今や天上のことが地上のことに取って替わり、些細なことが偉大なことに、消え去ることが永遠のことに取って替わっているのである。どこに心配や懸念の入り込む余地があろうか。こうした事柄の最中であって、信仰と希望のない者以外に、恐れたりおののいたりする者があろうか。死を恐れるのは、キリストの許に行くことを望まない者のしるしである。キリストの許に行くことを望まないのは、キリストとともに支配し始めることを信じない者のしるしでもある。(「死を免れないことについて」第2章¹⁵)

(2) 中世後期と宗教改革期のペスト流行について

①中世後期

14世紀のパンデミックにおいて、教区民を見捨てて逃げ出した聖職者を非難した記録が残されており、こうしたカトリック教会に対する失望はフスやルターの改革の遠因となったことが指摘される。ただし、この時代の聖職者の死亡率は一般信徒に比べて明らかに高く、このことは実際に教区民を見捨てた聖

¹¹ González, 17–48.

¹² 『エウセビオス「教会史」』134頁

¹³ 『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』295頁

¹⁴ 佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』(創文社、2004年)225–234頁

¹⁵ 『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』284頁